

令和2年度

熊本大学熊本創生推進機構

公共政策コンペ

オンライン シンポジウム

今年は

2020年12月21日(月)

15:00-17:00

熊本大学工学部百周年記念館

第一部 自治体の活動紹介

15:00～16:00

登壇者1 村上長嗣 さん
(菊池市役所)

登壇者2 平野利和 さん
(玉名市役所)

登壇者3 鬼塚正二 さん
(上天草市役所)

第二部 パネルディスカッション

16:00～17:00

パネリスト 村上長嗣 さん
平野利和 さん
鬼塚正二 さん

コーディネーター

田中尚人
(熊本大学熊本創生推進機構 准教授)

2020

第一部 活動紹介と公共政策デザインへの思い

子どもたち一人ひとりの『地元時間』
“かわまちづくり”で刻み込まれる心象風景が
未来の菊池を救う菊池市役所都市整備課
都市整備係 主事
村上長嗣 さん

地元時間を取り戻せ！

政策コンペについて当時考えたのは「地元時間を取り戻せ！進学先なんて関係ない。みんなが菊池の子どもたち」というテーマで、何か考えられないかなと同僚の園田、尾崎の3人で参加しました。菊池市は市外進学率が高く、菊池市内の中学校を卒業する生徒の6割以上が市外の高校に進学していて、地元に関わる時間が減ってくるという状況をどうにかしたいなと考えていました。そこで、地元に関わる時間を「**地元時間**」と定義して政策立案がスタートしました。

菊池には菊池遺産という制度があります。小さなお寺や祠のような形があるものや、無形の文化とか小さな地域のアイデンティティのような菊池独自の菊池遺産として登録する仕組みです。これらの多くは行政区で管理していて、高齢化や少子化で今後維持するのが大変になると思われます。ただ市の計画策定の際アンケートを見ると、若い人も高齢者も菊池独自の文化は大事だと思っているのが分かりました。市外へ進学して地元に関わる地元時間が少なくなっているのが、菊池遺産の維持管理が益々困難になるし、無形の文化もどんどん減っていく。守るべき文化が減ると郷土愛を持った若者が減っていく。そのような負のスパイラルになっていると考えました。

3つの政策提言

- そこで、①**菊池遺産を核にした菊池遺産の守人制度**(市内外の進学先に関係なく菊池遺産の守人として認定。)
②**高校生が主役の地域プロジェクト制度**(菊池遺産の守人をリーダーに、地縁で結びついた仲間で菊池遺産の魅力化に取り組む。)
③**大学との連携**(地域の人は自分の地元を

何も無いところ、つまらない場所と思いがちなので、学問的視点や別の角度で地域の見方を登用させる力を養う。)これらを三本柱として地元時間を取り戻していこうという3つの政策提言をしました。

目指す未来は、**地元時間を確保することで郷土とのつながりを強化していきたい**ということです。市外に飛び出したとしても菊池の子として地域の苦役やお祭りとか節目に帰ってきて、地域文化の担い手として活躍してくれると期待できます。自治体の枠にとらわれ過ぎることなく、人とのつながり方を有機的に考えることで時代の変化に柔軟に対応できるのではないかと提案しました。自治体の計画にはよく東京など都会のコンサルタントが入っているケースが多いのですが、もう少し自分たちの頭で足元からできることを考えてみよう、ということからスタートしています。菊池の各地にある**文化遺産「菊池遺産」**を核にして文化の種を小さい時に多くの子どもたちの中に植え付けることが大事です。

「かわまちづくり」とは

私が4月から取り組んでいる「かわまちづくり」とは、地域が持つ自然をいろんな人と連携して、**河川空間とまち空間**の二つを絡めて相乗効果を生み出していくという取り組みです。菊池の中心市街地に隈府というところがありますが、そのすぐ隣には**はざまがわ**、**迫間川**という川があります。ここはかつて、今の40代から50代くらいの人たちが子どもの頃遊んだり、お祭りや神事

になっていたところ。今は、川＝危険な場所という認識が広がっていて、地域の子が減ることで、川での上手な遊び方を以前は上の子から下の子たちが教わりながら遊んでいましたが、今は難しくなっています。そんな中でかわまちの取り組みとしてやっているのが、**菊池川キッズ探検隊とのコラボ**です。元々子どもたちと川での上手な遊び方などをやっていた団体です。そこと組んで迫間川で一緒にやりませんか、と話をもちかけ、小さな子どもたちにレクチャーしながら安全な川との付き合い方を学んだりしました。

次に、**ミズベリング**という水辺好きのつながりがあるんですが、7月7日の午後7時7分に一斉に水辺で乾杯しようと、大人もそこでもう一度川とのつながりを昔話でもしながら考えようという取り組みもやっています。これは上から見た図で、赤い線が御所通りと言って、隈府の中が一番端っこだ、元々中心的な通りがあり、その上の方が迫間川です。今回のかわまち事業でやっているのが、迫間川と書いてあるところの下に橋がありますが、そこから一番下の方に流れていって、橋のところまで活動しています。川と御所通りの辺りを中心として活動しています。これは地元時間だと考えています。



「かわまちづくり」の核となる「迫間川」と「御所通り」



政策コンペの際の構図と比較すると、対象は市外に進学した子どもたち、関係者は地域の人、大学、行政。核にしたのは菊池遺産。「かわまちづくり」の核となるものは**迫間川、御所通り**。これは、やっぱり地域の中で地元時間を確保していくことにつながると思っています。

政策コンペの時は菊池遺産を核として子どもたちに地域文化の種をまくことで、文化を柔軟に維持できるような形を目指しました。「かわまちづくり」では、迫間川や御所通りを核に、埋もれていた風景を掘り起こし、地元時間を過ごしてもらおう中で、子どもたちの心の中に川で遊んだり、菊池独自の風景みたいなものを刻み込んでもらうことで、将来にわたって菊池とのつながりをつないでいけるような場にしていきたいなと思っています。

御所通りも店が減ってきて、住んでいる方も高齢化してきました。また多くは住居兼店舗です。店を閉めても人は住んでいるという状況で、店舗の新陳代謝も進まないといった課題もありました。一方で御所通りには菊池高校があります。普段高校とのコラボは難しいのですが、菊池高校の校長先生と教頭先生が地域活動にも取り組んでいきたいということで、今回話をもち掛けたところ、今年6月から菊池域学連携として菊高生と熊大生が連携し、菊高まちづくり部が発足して活動しています。高校生がどれくらい来てくれるのか、正直不安な部分もありましたが、説明会当日はたくさんの生徒たちが集まってくれました。

ただ、迫間川と聞いてすぐわかる生徒は少なく、迫間川で遊んだ経験のある子はもっと少ないのです。菊高には合志や大津など近隣の自治体から通ってくる生徒も多く、高校からバス停までの動線にも川は含



迫間川での川遊び体験には多くの子どもたちが参加



ミズベリングで一斉に乾杯する大人たち

まれていないという地形的なこともあります。また地元出身の生徒でも川で遊んだ経験者は少なく、元々草木が生い茂ったり、御所通り側からは川にアクセスしにくいなどいろんな問題があります。ワークショップをやっている中で、高校生は最初「発表してもらいませんでしたが、回を重ねるごとに堂々と自分の意見を発表してくれるようになりました。」

川で遊んだ記憶をつないでいく

政策コンペの図に当てはめてみると、地元の方々や住民、高校生、子どもたち。それに大学と行政。核にあるのが「かわまちづくり」で、迫間川、御所通り、ここを核にもう一度かわまちを中心にみんなをつなげていきたいです。大人には昔を思い出しながら足元に目を向けてもらったり、子どもたちには地域で遊んでもらったり、高校生は将来県外に住んだとして、自分に子どもができたとしても「ここはお父さん、お母さんが一緒に計画に参加して作ったかわまちの場所だよ」とか、そういった景色を記憶に残してもらいたいと思っています。将来外に出て行っても、菊池に住んだとしても、地元との関係が切れないような取り組みをしていきたいと考えています。



菊高「まちづくり部」説明会

楽しむその先に

政策については、まず**興味を持つこと**が重要です。熊大に派遣されている時も、指導していただいた田中先生や上野先生に「**あなたは何に興味があるのか**」と聞かれ、地元や住んでいる地域に興味を持つことがスタートではないかと気付きました。若手職員も市外出身が増えていますが、自分の仕事以外の他の部署の仕事にも興味を持つことが第一歩ではないかと考えます。

私たちは自治体の職員なので、政策のレベルも大規模なものではなく、目の前の家とか集落に住んでいる人たちを対象にしたものが中心となります。**足元感覚や肌感覚をなくさないようにすることが大事**です。また、**役所だけでは何もできない**と意識を新たにしました。**大学、地域の方、高校などと関係者をつないでい**かないと、役所はフォローや縁の下の存在であるのがよいと感じています。そして**自分が楽しめているか**が、その後の活動につながっていくという意味でも大事じゃないかなと思っています。



「まちづくり部」では高校生の目線で地域を考えていく

負のスパイラルからの脱却

『玉名未来づくり研究所』高校生×大学生×大人
アイデアや想いをカタチにしていく

玉名市役所企画経営部
地域振興課 係長
平野利和 さん



『未来づくり研究所』とは

私は玉名市役所地域振興課で、地域づくりをメインに色々な仕事をしています。そこで、『未来づくり研究所』を本年度実施しました。きっかけは、我々が移住定住担当で若い人が転出したっきり戻ってこないことに気付いたからです。当初、若者はどこで働いているんだろう？ どうしたら若い人にアクセスできるんだろうか？ というような話をしながら、だったら同窓会などに飛び込むか、という話になりました。しかし見事に財政課から予算を切られまして再考。それなら直接若い人たちに参加してもらえような“何か”を創ろうとなり、誕生したのが若者主体のワークショップ『未来づくり研究所』です。

若者の流出は地域の衰退につながる

玉名市には5つの高校と1つの大学があります。昼夜間の人口を見ると15歳から19歳は夜間では10位、お昼になると5位に上がります。つまり高校という存在が玉名にとって強みで、地域の活性化になっているということです。実際JR玉名駅の乗降者数を見てみると、なんと熊本県内でも6位に入っている。結構上位の駅だというのが分かりました。それだけ高校生や大学生が多いということです。しかしそうは言っても、高校は定員割れしているという現実もあります。玉名市で一番有名な県立玉名高校でさえ、ここ数年は定員割れをしている状態です。県立玉名工業高校は違うようですが、県立北稜高校に関しても同様の状況になっています。

人口減少と負のスパイラル

図1は年齢別の人口移動分析ですが、見てもらうと分かるように、15歳から20歳、30代ぐらいで、一気にがたんとながっています。この青い線が一番新しい統計です。谷から山になっていないのは人口の転入が

増えていない、ということを示しています。一般に「人口の負のスパイラル」というものがあります。人口が減っていくと、過疎化、高齢化が目に見える形で進み、地域があつという間に衰退します。さらに小学校や、病院など、そういったものが統廃合を重ねると、生活にコストがかかるようになりさらに少子化に拍車がかかります。地域にとって高校は最後の砦で、高校の統廃合は、地域から若者の姿を失う状態にする危険性をはらんでいます。

帰ってきたい玉名、住みたい玉名へ

そういった中で、令和2年8月から『未来づくり研究所』を開催しました。“玉名に住みたい、住み続けたい、帰ってきたい玉名を創る”というコンセプトで行なっています。参加者は高校生以上、39歳以下、玉名に縁のある若者で、玉名出身であるという制限は設けませんでした。コロナ禍で最小の人数で実施することにしました。結果、参加者は大学生以上が23名、高校生が23名と丁度半々でした。実施は第6回まで行い、ここにいらっしやる田中先生にも加わっ

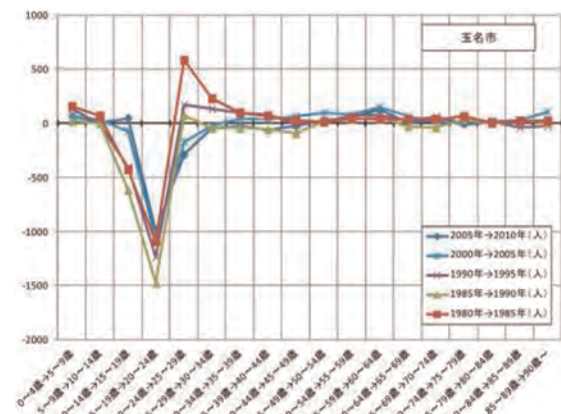
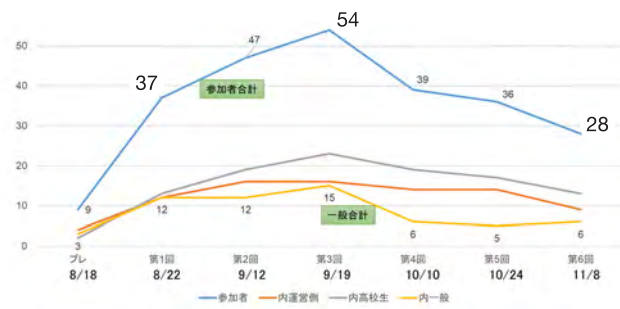


図1 玉名市の年齢階級別人口移動分析(1980年から2010年、総数)



実施日	プレ	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	延べ	平均
全体参加者	9	37	47	54	39	36	28	250	35.71
内運営側	4	12	16	16	14	14	9	85	12.14
内高校生	2	13	19	23	19	17	13	106	15.14
内一般	3	12	12	15	6	5	6	59	8.43
純参加者	5	25	31	38	25	22	19	162	23.57

『未来づくり研究所』参加者の推移(実数)



▶第1回：完全オンラインで実施 ▶第2回：RESASを使い地域づくり ▶第3回：プロトタイプを学ぶ ▶第4回：デザイン思考を学ぶ ▶第5回：アイデアの具現化

ていただきました。参加者の推移をまとめたんですが、3回目がピークで54人。残念ながら徐々に減っていき、特にひどかったのが一般の参加者で、急速に離脱していきました。アンケートから判断すると、自分が興味のない事柄に対しては興味が薄れたとありました。これは要改善です。

「玉名人」をつくる

具体的にどんなことをやったのかというと、1回目は完全オンラインで実施しました。2回目以降九州財務局の渡邊隆司さんや、元東京大学公共政策大学院の奥村裕一さんをお招きし、お話を伺いながら対話をつづけました。そしてこちらの6つのアイデアが出ました。大まかに分けると4つです。

- ① サードプレイスに関するもの
- ② 勉強に関するもの
- ③ 音楽のまちに関するもの
- ④ 農業に関するもの

非常に面白そうで楽しそうな案がたくさん出てきました。玉名市はこれをどういう風に活かしていくか、言葉は難しいのですが、「玉名人」を育成していきたいと考えています。つまりこの皆さんが考えたアイデアを実際に町に落とし込んでみて、それを実現することによって、さらに町を面白くしていくことです。個人々が玉名に、社会に関わることで自分にとっても非常に楽しく、周りの人にとっても楽しい、というようなところを作り上げていきたいと思っています。

「個人化」に対する「市場化」

もっと玉名が魅力的な街になるためには、都市全体をサードプレイス化する構想を持っています。これは最近広まっている「個人化」という考え方に対して「市場化」ということを意識しています。人は一人でいた方が

楽なんです。でも他人とつながることが非常に重要で、これを誰が仕掛けるのか？ というと、やっぱり行政じゃないかなと思います。これが公共政策に関わってくるのですが、市民と関わり続ける仕組みを我々はどうにかして生み出さなければならない。菊池市も上天草市もそういったことをやろうとされているんじゃないかなと思っています。



▶第6回：発表会ではチームごとにプレゼンテーション



参加者が主体となり実施(したい)6つのプロジェクト	令和2年度研究結果
□チーム名	□プロジェクト概要
1 TUNAGU	古民家を再生し、玉名の老若男女が集い畑や手仕事などを習い、都会(ふるさと納税)に売り出す。
2 おばあちゃん家	おばあちゃん家みたいな居酒屋。地産地消を促し、(小)農家で利益をだす。居心地のよいゆっくりとした空間
3 ホワイトファーマーズ	「農業を通じた玉名のまちおこし」品種改良の種で知財を確保、農業が魅力的になれば人口が増え、市の経済水準を向上させる。
4 MUSIC TOWN	音楽のまち玉名を浸透させるために、ライブハウスをつくり、様々なアーティストが来る町にする。また音楽で世界と交流する。
5 勉強させ隊!!	学生のまち玉名には、勉強するところがない。学生限定の勉強カフェをつくり、様々な高校生が勉強を教え合うようなコミュニティを創る。
6 北稜	JR玉名駅に学生限定カフェ、勉強スペースを創る。高校で作った野菜などを販売したり、加工して飲食物の提供を行う。

上天草市

日常的に開かれている拠点があること
そんな「場」をコーディネートするのが
行政の役割

上天草市企画政策部企画政策課
地方創生係長
鬼塚正二 さん



人口が減り続ける上天草市

上天草市の人口は1950年、合併前の旧四町、大矢野町、松島町、姫戸町、龍ヶ岳町のピーク時に5万5千人でした。そこからずっと下降し、最新の国勢調査によると、2万5千人を切っています。県内14市の中で一番人が減っている市です。若者が少なく、高齢者が多いという状況です。上天草市の人口減少の特徴は、地元中学校から高校へ進む時、約7割が市外に出てしまいます。地元高校に残った人もゆくゆくは市外に進学、就職してしまいます。私の親の世代の約60年前は、1学年3クラスほどありました。私の小学校時代は1クラス35人で、現在は1学年10人未満というような状況です。市内の小学校はほぼそういう状況で、子どもたちの将来の夢にも影響しているのか、なりたい職業が地元でない、地元に残りたくない、市外に出てみたいということになっています。

上天草市で起きていることは、担い手不足であり、産業もしかり、地域もしかり、耕作放棄地も増えていて、空き家もどんどん増えています。まちづくり活動では、まちづくり助成金があり、市のまちづくり団体が申請して認められれば市のお金を使って活動ができます。その申請件数も平成23年には7件ぐらいあったのが、平成31年(令和元年)には2件、本年度はコロナの影響もあってゼロという状況です。

上天草市で働きたくなる・住みたくなる

これが上天草市のまち・ひと・しごと創

生総合戦略における取組の方向性です。「上天草市に行きたくなる!」と「上天草市で働きたくなる!」の、働きたくなるを二つに分けて、「働きたくなる」「住みたくなる」というようなテーマを持って、色々な事業に取り組んでいます。上天草の情報発信をして行きたくなる状況を作り、体験だったり、働きたくなくて、住みたくなくて、上天草の



生かすやすさを向上させて、さらにそれを情報発信する、これをぐるぐる回していくというのが上天草の地方創生の基本的な考え方です。最近、田中先生から「この循環して持続することがSDGsの考え方だ」という言葉もいただいています。

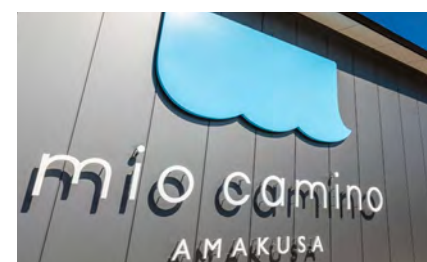
情報発信とハード整備

去年、観光交流活性化施設「ミオ・カミーノ天草」という施設をオープンさせました。体験の拠点としてサイクリングやシーカヤック、雨対策としてポルダリングもできるようにしています。それと千巖山を整備して展望所も作っています。情報発信の1つとして移住とお笑いを組み合わせて、お笑い芸人のロバート秋山さんとコラボして動画を作成しました。伝説のバックパッカーの移住

者夫婦を演じてもらい、上天草での生活の動画を作っています。これを第三弾まで作って213万回再生、そして透明過ぎて目視できない湯島出身の美少女の動画は第二弾まで作って、446万回再生まで伸びています。自治体の動画制作は結構はやっていますが、再生回数で行くと都道府県レベルまで伸びている状況です。湯島をテーマにしたショートムービー「島のシーグラス」も作っています。田牧そらさんという子役の方に出演していただきました。このように1年目は情報発信やハード整備を中心にやってきました。

上天草市が好きになる

令和二年度からの5年間でこれまでの課題を踏まえてどう取り組んでいくか。「行きたくなる」「働きたくなる」はそのままにして、その上に「上天草市が好きになる」を追加しました。これは関係人口の創出・拡大、市民の参画意識の醸成(シビックプライドの醸成)ということ。その代表的な取り組みは、今市内の中学校で「起業家教育を活用した地域の担い手育成事業」として地方創生推進交付金を活用しながら、上天草市教育委員会が実施しています。中学生のキャリア教育の一環として、地元産業経営者による講演会、学校や地域の課題やニーズの把握、アイデア創出、主にピ



観光交流活性化施設整備/ミオ・カミーノ天草

KAMIAMAKUSA



ジネスプランに向けた実践を行っています。

高校生もまちづくりへ参画

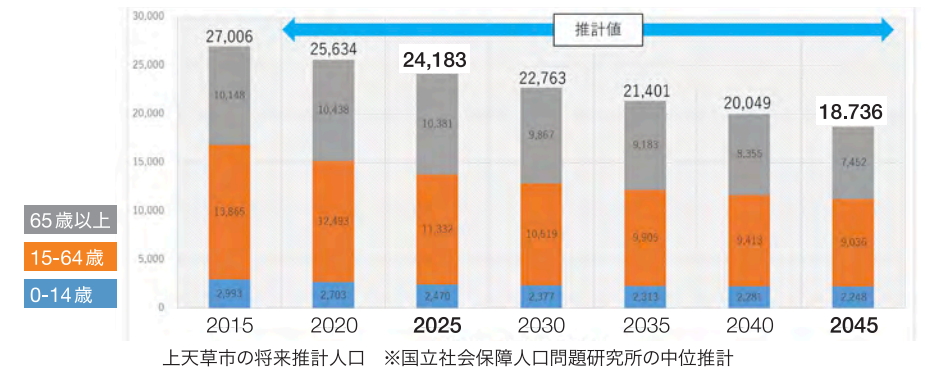
もうひとつが市内唯一の高校、上天草高校が選ばれた文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」です。両事業とも高校生や、中学生が考えたビジネスプランにアドバイスを送ったり、一緒に考えたりそういった中高連携も行っています。両方とも上天草の課題を生徒自身が調べて対策、ビジネスプランを考える機会を創出しています。これ以外にも上天草高校生の市の事業への参画も積極的にを行っています。上天草市中心部の宮地地区開発の案を高校生と地域の経営者や地域住民、行政と一緒に考えて考える機会を作っています。また、姫戸地区、龍ヶ岳地区の振興策として地域の担い手の方と高校生と熊大生に参画いただいて、今年度まちづくりのプランを検討しているところです。

シビックプライドとは

シビックプライドの醸成、関係人口の創出を進めていくと、上天草市に残る人が少しでも増えるのかなと思います。「みんな残れというのはよるしくないよ」との田中先生からの助言もあります。そういった多様性は高校生のうちから狭めるべきではないというアドバイスもいただいています。出て行ったとしても、就職してもいつか戻って来



千巖山整備



たり、市外に住んでいても上天草を好きでいてくれる人を増やしたいのです。例えば地域の行事の手伝いを、年に何回か帰って来てもらったり、離れていてもふるさと納税という形で市を支援したり。2地域居住という新たなライフスタイルもありますので、半分上天草、半分都市部という生活の仕方もあるのかなと。また、仕事で上天草の素材を使っていたり、そういったことも若いうちから地域を知り、地域のことを考え、地域の課題を知る機会を作ることでシビックプライドが醸成されて、将来の上天草市民にならなくても、関係人口や、ファンづくりにつながっていくのではないかと考えています。

上天草の地域づくり、地方創生に携わって考えていることは一つ目が「地域に飛び出す公務員」。二つ目に「共同、協働ではなく、協働」。三つ目に「交流の場づくり(一緒に考えて考える場)」です。人口減少により担い手不足は今後も継続していくと思います。地域レベルでの行政主導の取り組みはなかなか持続しないし、自治体職員は地域レベルにおいても今後重要な担い手であるのは間違いないと思っています。

「自分事化」と「協働」

市民と一緒に考えていくのが重要で、共同や協働ではなく協働が重要ではないかと考えます。国語辞典で調べると、「共同」は、「複数の人や団体が同じ目的のた



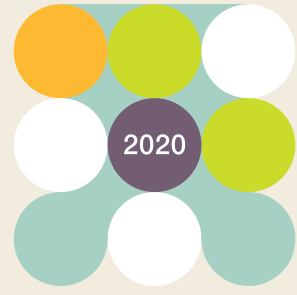
ロバート秋山さんとコラボした動画

めに一緒にことを行なったり同じ条件・資格で関わったりすること。「協働」は、「同じ目的のために対等の立場で協力して共に働くこと」。私が考える「協働」は、「課題をみんなで共有し自分事化していただき、目標を一緒に考えて対等の立場で、それができることを協力して楽しみながら行なうこと」で、今後の公共政策やまちづくりにとって重要だと思っています。小さい成功を積み重ねて共有するのが楽しみ方ではないかなと思います。いきなり大きな成功ではなく、小さなことの積み重ねで気分を盛り上げていくという楽しみが必要ではないかと感じています。

三つ目の「交流の場づくり」が、これからの担い手の少ない自治体における重要なテーマになってくるのではないのでしょうか。課題を共有する場、自分事化して目標と一緒に考えて考える、みんなができることを考える、楽しみながら実行していく、そのため交流の場に地域住民や高校生、自治体職員、熊大生も入っています。専門的な知見や客観的な視点も重要になってくるからです。今、地域おこし協力隊という、自治体にとっては非常にありがたい都市部から人を連れてくるような仕組みがあります。そういった協力隊も入れながら、交流の場を作っていく、その場が日常的に開かれていく拠点がある、その場をコーディネートするのが行政の役割なのかなと考えています。



地域の魅力 × 映画「島のシーグラス」

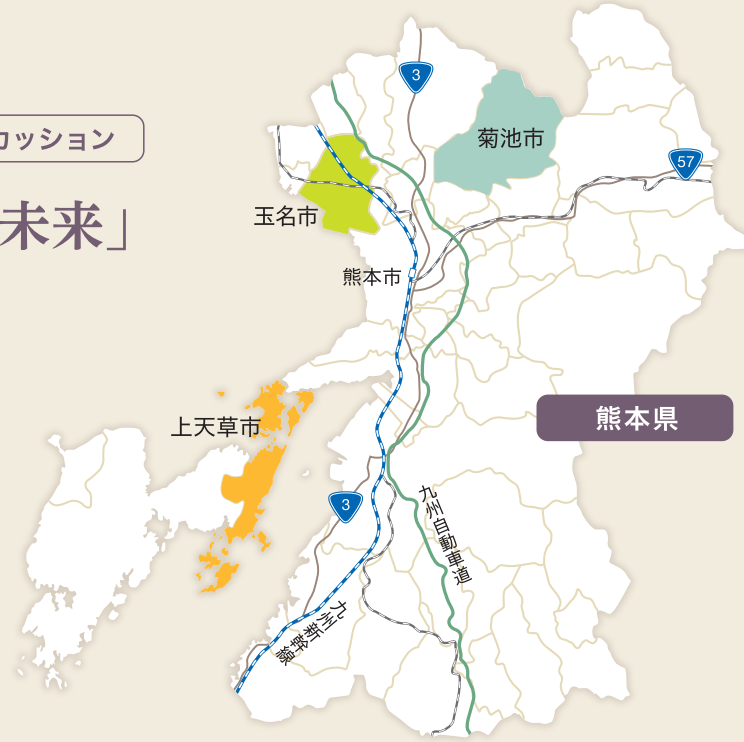


第二部 パネルディスカッション

「公共政策の未来」

パネリスト 村上長嗣 さん
平野利和 さん
鬼塚正二 さん

コーディネーター
田中尚人
(熊本大学熊本創生推進機構 准教授)



田中：少子高齢化や若者の地域離れ、担い手不足などについて話して参ります。シビックプライドという言葉があります。地域や町に対して持つ愛着や誇り、自負という言葉を使っています。このシビックプライドの涵養と、地元のことをどうやって学ぶのが大事になってきます。能動的で対話的な深い学び、新しい学習指導要領では小学生もこういうことを取り入れて勉強しています。この中で私は甕島の山下さんの言葉を借りて「桃太郎はなぜ鬼退治に行くか」という問題から、目的と手段を間違えてはいけません、政策は手段でしかなく、目的は地域の幸せやひとりひとりの成功体験だという話を学びました。

村上さんは政策研究員として2年間熊本大学に来ていただいて、学生たちにも興味を持つことが大事と言っていました。自治体の公務員として、興味を持つこととコンペで得た体験が、かわまちづくりに通じていると言っていた。コンペをやっているときによかったことや、どうい

話し合いをして、それが自治政策に結びついたか教えて下さい。

コンペと自治政策の結びつき

村上：コンペには自分も参加してみたいと思ったのがスタートで、一人で参加しなくてよかったなと思います。3人それぞれの視点や考え方をぶつけ合っ出てきたのが「地元時間」でした。

田中：チームで取り組むのがよかったということですね。それが今の実務に結び付いたのは日ごろからそのような考え方をしていたからですか？

村上：以前から役所の自分の業務とは関係ない他の部署の動きに興味がありました。その中で菊池遺産のことも業務として関わったことはありませんでしたが、地味だけどいい施策だなと思っていて、これをもっと生かしたいなと思ってスタートしました。

田中：行政マンとともに良き市民として自分が住んでいるところに興味を持ち、研究的な視点が行政マンとしても役立つと感じました。平野さんが二人の働きぶりを見て、自分と似ていると思うのではないですか？ 今の若い公務員はこういう働き方を普通になされているのでしょうか？

平野：役所の仕事は基本的にルールがあり、それを逸脱するとチェックが入ります。自由に物事が考えられるかどうかは、部署によって違います。わずかな機会を無駄にしないで欲しいし、そのためには日ごろから自分の町に関心を持っておくのが重要ではないかなと思います。

「個人化」と「市場化」

田中：発表の中で、個人化に対する市場化という話がありました。



車石八幡宮と乳母が墓。ともに菊池遺産だが高齢化人口減少により維持管理が難しくなっている。



「広報たまな」令和2年12月号で活動が紹介された



ミオ・カミーノ天草内のインフォメーション

効率性を求めると自分でやったほうが早い、人と一緒にやるのは煩わしい、めんどくさいこともあって、一見無駄なこともあるのかなと思います。「市場化」とはどんなニュアンスで使われているのでしょうか？

平野：社会に触れようと思わないと他人とつながりません。例えば仕事で色々な出会いがあるよねと言われますが、実際は日々の仕事に忙殺されて本当の市民の声を聴くことはなかなかできません。町に飛び込む努力をしないと、いいまちづくりはできないのではないのでしょうか。

田中：鬼塚さんは違う組織に出てみて、帰って来て思うことは何ですか？ 上天草市は世代によってどんな違いがあるのでしょうか？



外に出たからこそその貴重な経験

鬼塚：県に出向したときに、県の職員のほうが市の職員より上天草のことを知っていました。市の職員として市民に接するときに、知らず知らず壁を作っていたと思います。県の職員が市民が困っていることを直に体験して施策にしていたのだと気づきました。これはすごいなと。困っている人がいてニーズがあってこの事業をやる。ただ何も考えずに職員が頭でかちで机上の空論で考えたのをやるのではなく、ニーズや課題を体感するのが重要だと認識しました。地域活性化センターにも行きましたが、ここで地域づくりの先進地を知る機会があって、印象に残ったのは静岡県裾野市の市議会議員の話です。地域の小学生が月一回体育館に泊まる「なんにもしない合宿」を子どもたちは楽しみにしている。そこで巣立った女の子が「私はこの地域で子どもを育てたい」と言ったというエピソードを聞きました。自分もそういう事業をするなら、子どもたちにここに住みたいとか、ここで子育てしたいと言わせたいと思いました。外に出ることで客観的に地元を知ることができるので非常に大事な経験だったなと思います。

楽しみながら自信を持つ

田中：上天草市は先進事例だと思っています。それを鬼塚さんが自分事として実現していることが分かりました。最先端のことをやっているという自負はありますか？

鬼塚：どうせやるんだったら、楽しみながらというのがあります。

自治体職員だけでなく、民間の力を取り入れて広く提案いただいで、いい提案に対して採点してこの事業をやってみようとか、もう少し民間の力を導入できるようなことは今の企画政策課でも注力しています。県内自治体の中でも少し目立ったことはやっているのかなという自負はあります。それが職員の自信になってやる気にもつながっています。

中高生の連携がキーワード

田中：村上さんは「かわまちづくり」、平野さんは「未来づくり研究所」。上天草は中高一貫をやっている地域で、基本的な読み書き表現を高校生が中学生に伝えています。菊池高校でも中学校との連携を図っており、3市とも子どもの市外流出をあきらめず何とか一矢、と共通しています。

仲間づくりの秘策

平野：どうやって仲間づくりをしてきたんですか？

鬼塚：今年度から姫戸町と龍ヶ岳町の地域振興をやっていますが、その中でも一番目立つ人を取り込もうとしています。姫戸町は天草大王を生産している方を始め、次々と味方につけました。来年度以降最終的にチームになればと考え声かけしています。

村上：菊池は地元で元気がなくなっていた中で、頑張ろうとしていた人がいたけどなかなか続きませんでした。そんな人をつかまえようと、かわまちづくりの協議会の前に、個人的に区長さんにかわまちの内容を説明して盛り上がったところで協議会に参加してもらい、アナログな感じでやる気を引き出しました。

田中：なかなかできることではありません。鬼塚さんのやり方は古いようで新しい一本釣り。やる気のある人がやる気のある人を連れてくるほうが盛り上がるのを感じました。かわまちづくりをやっている学生の高松君は、仲間づくりに引き入れられたの？

高松(熊本大学院生)：菊池市の皆さんが楽しそうにウェルカムな雰囲気や招いていただき、地元総出で頑張っていて、一緒に楽しくやっているなと感じました。

田中：菊池は上手ですね。かわまちづくりのいいところは、川づくりとまちづくりと一緒にやるのがポイントで、境界線があいまいだからこそ仲間を引き入れやすいですね。



自分事としてとらえる

村上：上天草の、地元出身者の客観的視点は大事だと思いますが、それをまちづくりに入れるのはすごく難しい。地元の人からは「お前は出て行つたくせに口ばかり出して」となりがちです。それをどう乗り越えて、取り入れていくのですか？

鬼塚：実際にはなかなか出来ていません。地元出身者と地元に住んでいる方が一緒になってやり、課題を共有して目標を設定するのが大事なのかなと思います。

村上：同じ課題をいかに見つけるか課題設定が大事ということですね。

田中：裾野市の話に興味があります。目的とビジョンを描いてそれを達成するためにどうするかという作業はよくします。今大事なのはプラットフォームと言われていて、目的を、自分たちで持つという組織はどうやって作れるのかなと色々試みていますが、なかなか難しい。裾野市は子どもたちが帰ってきて暮らしたいと思っているんですね？

鬼塚：実際はただ小学校の体育館に泊まるだけです。6年生が1年生の面倒を見たりとか、自然にルールができたとか。本来中学生は参加できないのに、お手伝いでもしたいという希望があったりします。母体はPTAのおやじの会で、おやじの会も言い出しっぺが主体で、小さな成功を積み重ねています。



先輩から後輩へ

田中：プラットフォームになると持続可能性が高まります。村上さんの事例の中のキッズ探検隊が復活した時のリーダーが、探検隊の経験者でした。自分がやってもらったことを後輩にやってあげたい。そういうものが生まれる仕組みが、未来づくり研究所じゃないかなと期待しています。平野さんの当初目的と結果はどうですか？

平野：正直あまり考えないようにしていました。始めてみればどうにかなると。コミュニケーションを作っていくこと、人と人がつながることが一番重要で、課題設定とかあまり重要ではありません。この人と一緒にやれそう、面白そうというのが楽しいまちづくりの第一歩につながるのではないのでしょうか。

日名子(熊大生)：未来づくり研究所に関わり、個人化に対する市場化が印象的でした。市場化して他人とつながって玉名市としてはどうことができるのでしょうか？

平野：とにかく小さな社会をたくさんつくるのが大切なと感じています。そしてまちに飛び出して人々が交流するのが一番いいかなと思っています。

自治体と大学の連携

鬼塚：自治体の事業と大学の連携についてよかったこと、今後

大学と行政の政策との連携を考えるにあたって、今の考えを教えてください。

平野：大学と連携する意義は、そこにコーディネーターがいるかいないか。コーディネーターが市役所の業務にうまく合致させることができたならいい成果を出せます。連携先の先生方が、行政たるものはこんな風に扱った方がいいというものを持っているかどうかで全然違うと思います。

村上：学生の力も大きいです。地域に大学が無いので、学生が入ってきて行政と住民の間で専門的な知識を持ちながら若い人の意見を話してくれるのが大きいし、高校生よりも一歩大人の立場からダイレクトに言ってくれる存在が大きいと思いました。

田中：平野さんの話は自分も意識しています。言葉が違うのを自覚しておかないと、単年度で動いているとか、学生のために動いているとかそれぞれ目的を持っているので、できるだけ共通の言葉とか、目標をクリアにしていって、協働するのが大事だと思います。「飛び込む、ダイブする」のを大学も意識してやっています。自分も答えを持ってない時もあるし、答えが見えている時もあります。ここにおられる3人はいっぺん引き受けて、やっぱり無理とか、一緒に作るとかできているのが楽しいし、やりがいがあります。今までやってきたことを続けるだけじゃなくて、新しい挑戦をするときに新しい連携が生きてくると思います。



コーディネーターの役割

王(熊大大学院生)：シビックプライドに興味を持って、それをどうやって地域に実行できるか知りたいです。地域企画プログラムに高校生と中学生を参加させて効果を上げていますが、そのプロセスで問題やエラーは発生しましたか？

鬼塚：上天草高校でコーディネートしているのが、地域おこし協力隊という制度でよそから上天草市に来て3年間活動された人が高校と地元をつなぐ役割をしています。その人が高校生と地元の人を会わせると面白い化学反応が起きるといふ思いもあります。いったん外に住んだ人が協力隊に入ったからこそ、客観的な視点でうまくコーディネートできたのではと思っています。

田中：色々な言葉を理解したキーマンがコーディネーターとして生かされ、子どもたちもよく応えています。うまくいかないことは何かありますか？

鬼塚：高校生と地域の大人たちとマッチングさせるところを、今は行政とのマッチングが多くなっています。行政と地域産業の経営者とで半々にするのが理想かなと思っています。

地域への愛着と愛憎

高良(熊大大学院生)：3自治体のワークショップに参加しましたが、若者が地域にどうやって愛着を持つようになるのでしょうか？

村上：地元への愛着は、好きなだけでなく愛憎入り混じったものだと考えています。好きな面もあ



れば嫌いなところもあるし、最終的には自分が小さい頃そこでどういう過ごし方をしたのかが大きいと感じます。地元時間で地元とつながる時間を増やせば、出て行ったとしてもつながってくれる人が増えるのではないかと考えています。

平野：高校生は自分の将来や学校の成績が一番の関心事で、地域に目を向けることはほとんどありません。地元の高校生にインタビューしたときに玉名でいいところはないかと聞いたら自分の通学路だけしか知らないとか、自分の好きな風景は自分が通うバス停という答えに驚きました。よく聞いてみると、そこでは地元の人に出会えるということでした。早く玉名を出たいとか自立をしたいとかいう若者に、このワークショップを通じて帰ってこれるきっかけや足跡を残しておきたいと考えています。

鬼塚：上天草では、その地域のいいこと悪いことを高校生も一緒に出し合うワークショップがいい機会でした。若い子はなかなかそこまで考える機会もないし、自分が高校生の時は地元には不満しかありませんでした。高校生や中学生のうちにいいところ、悪いところを考える機会を持つのは大事なことだと思います。



オンライン参加者から

田中：3人の答えも似ているようで少しずつ違います。平野さんの回答には自分もあらためて気づかされました。あまり多くを求め過ぎず繰り返し語れる場や仲間探しでもいいと。オンラインで参加している人の中で西南学院の工藤先生いかがですか？

工藤(西南学院大学)：皆さん活発に活動し、鋭い問題意識を持っています。深く難しい問題に取り組んでいて、その解決方法が公共政策になっていきます。ただうまく解決方法はないというのが率直な感想です。おそらく自分の生まれ育ったまちを嫌っている人は少数で、多くの人は可能なら自分の生まれ育ったまちに愛着もあるでしょうが、そこにそのまま住まうのは難しいという日本の構造があります。出ていく若者の流れを押しとどめる働きかけもあるかもしれませんが、現実を受け入れて、まずは今暮らしている人たちを大切に、充実させていくという観点も行政には必要だと思います。



最後に

田中：人の流れは簡単に変えられません。若者がすべてではないし、未来を作っていくのが公共政策の役割としてあるとしたら、それは行政だけではできなくて、市民や大学もパートナーとしてやっていけるのかなと感じました。それでは感想を一言。

村上：行政の先輩方の活動を見て自分ももっと頑張らないといけないと感じました。自分が大学に派遣された時に、人口減少は問題ではなく現象だから、人が減っても地域を維持できる仕組みを考えるのが大事、と言われたことを思い出しました。

平野：孔子の言葉に「近き者喜ばば、遠き者来る」とあります。まず身近な人で楽しもう、そうすれば、遠くにいた人も気付けてくれるだろうし、つながろうという関係性を求めてきます。楽しむプラットフォームを市民と自治体が作れば、熊本がワクワクする地域になるんじゃないかと思っています。楽しいことをお互いできる範囲で実現していく「協働」のまちづくりができればいいかなと感じました。

鬼塚：皆さんの意見が刺激になりました。まずは地元の人が楽しむのが大事で、自分が楽しめなければ魅力を外に伝えられません。地元を楽しむ人が増えていけば、外からも来なくなる地域になると気付かされました。今後も地方公務員として忙しい中でも楽しみながら残りの人生を送りたいと思いました。

田中：政策コンペは熊大の看板だと思っています。これを失くさないためにも、議論・対話を続けていくのが大事です。熊本は若手の公務員が元氣だと言われる地域になることで、若者からチャレンジャーが出てくると地域づくりの未来は明るいと思います。プラットフォームをめざして自律的に動いて行くようにサポートするのが政策だと思います。





菊池市
玉名市
上天草市



国立大学法人 熊本大学
熊本創生推進機構 地域連携部門

〒860-8555 熊本市中央区黒髪2丁目39番1号
tel 096-342-3463 fax 096-342-3486
e-mail : coc-plus@jimu.kumamoto-u.ac.jp
<http://www.cps.kumamoto-u.ac.jp/seisakusozo/compe/>

こちらからもご覧ください→
過去の TEAM ENTRY LIST



熊本大学 公共政策コンベンション 検索